

# 小学校外国語(英語)活動

— 理論から実践へ —

内 藤 徹

(2010年1月30日受理)

## Elementary School Foreign Language (English) Activities

— From Theory to Practice —

NAITO, Toru

### 0. はじめに

平成21年3月に高等学校の新学習指導要領が告示された。小学校、中学校は前年に告示されていて、外国語(英語)教育においては大きな転換点になる改訂と考えられる。

まず、全小学校に外国語活動が導入され、平成21年4月からの移行措置を経て、平成23年度から完全実施されることになった。中学校では、小学校との連携を図ることが指導要領に明記され、語彙も約900語から約1200語に増加された。そして、英語の時数も週3単位時間から4単位時間に増加され、全教科の中で一番時間数が多い教科となった。中学校では学習定着度がよくないという調査結果もあり、内容の定着を計ることが求められている。高等学校では、今までとは異なる科目構成となり、文法事項に関しても、必修の「コミュニケーション英語Ⅰ」で全ての事項を取り扱う。また、「授業は英語で行うことを基本とする」と書かれている。

それでは、高等学校・中学校・小学校の英語教育全体を概観したうえで、小学校での外国語(英語)活動がどうあるべきかを考えていきたい。

### Ⅰ. 新学習指導要領のポイント

— 高・中・小を通して —

#### 1. 高等学校

今までの、「オーラルコミュニケーションⅠ」「オーラルコミュニケーションⅡ」「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「リーディング」「ライティング」が「コミュニケーション英語基礎」「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」「コミュニケーション英語Ⅲ」「英語表現Ⅰ」「英語表現Ⅱ」「英語会話」にかわることになる。また、「授業は英語で行うことを基本とする」とあるが、生徒達の発達段階や習熟度に応じて、理解可能な英語を使って授業をすることが必要である。日本はESLではなくEFLの国であるから、内容を深めるには母国語を有効に使うことも必要である。

小学校で素地を作って、中学校で基礎を養い、その上の高等学校で発展させるという積み重ねである。そして、日本の高等学校を卒業したら「コミュニケーション英語Ⅰ」はみんながマスターしているという共通性、つまり多様性の中にも共通性を求めたところが今回のポイントであろう。

## 2. 中学校

週4コマになり1時間増えた。全教科年間980時間中140時間(14.3%/全体)を英語が占めたことになる。増えた1時間をどう使うかがポイントとなる。教師の発問で生徒達が考えたい場面を作ることが求められると言えよう。そうでないと、小学校で育ててきた素地が十分に活かさないことになる。

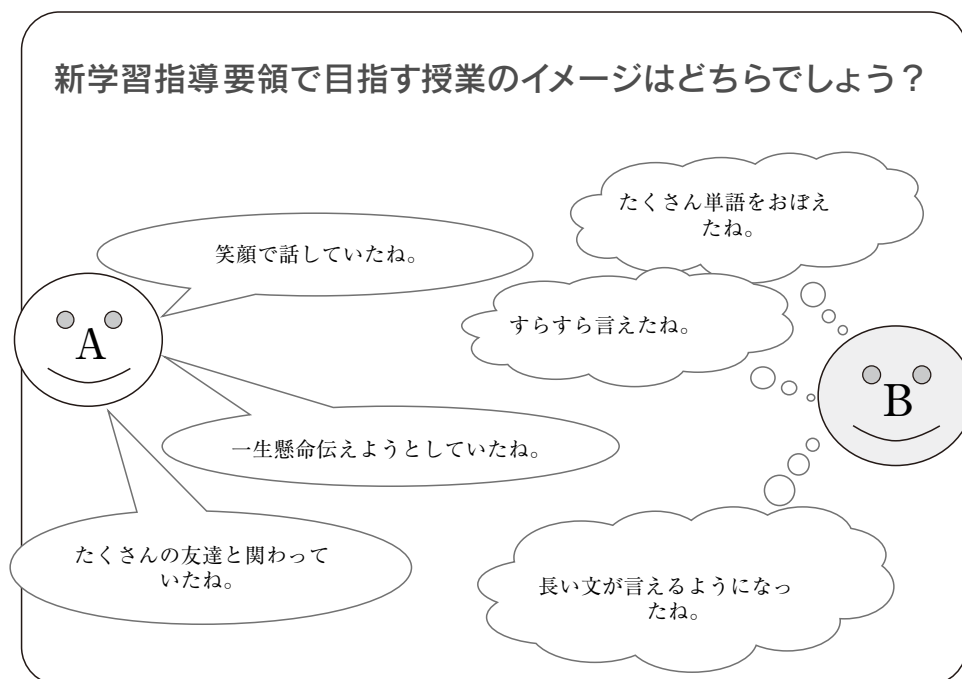
語彙については、小学校で「英語ノート」を使った場合約280語の語彙に触れ、中学校では280語も含めて1200語、高等学校では1800語(コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲでそれぞれ400、700、700語)増えて、卒業までに約3000の語彙に触れることになる。

## 3. 小学校(人間教育としての外国語活動)

中学校の先生が小学校で授業をすると、つい教え込もうとか定着を図ろうとして、うまくいかないことが多い。全然文化が違うことを認識する必要があると言われる。

小学校英語に何年か携わった教員の成果をあげてみよう。1) 他の授業でほとんど口を開かなかった児童が始めて英語活動の時間に口を開いて声をだしてくれた 2) 英語活動でアイデアを考えたり工夫をしたりしていることが他の教科の指導に活かせる 3) 他の先生と協力することによって連帯感が生まれ職員室に活気が出た 4) 特別支援の児童が同じ教材で同じ時間に活動できることに教育的価値があった、などがある。子供達の新たな良さを見いだし、どの子もキラリと光る場面を作れる場となるようにするのが望ましいと言える。小学校の外国語活動は、コミュニケーションをとりたい、人の話を一生懸命聞こうという子供達の情意面を育てることである。そして、小・中・高の連携を考えて、それぞれに繋がりのある教育を行うことが必要である。

さて、新学習指導要領では次のA、Bのどちらを目指しているのだろうか。[佐貫:内藤改2009]



Aはコミュニケーションをしようとする態度の育成を目指しているのに対し、Bは語彙力・文法力・流暢さを強調し定着を意図している。従って、今回の小学校外国語活動ではAの方向性を目指していると言える。

#### 4. 小学校外国語活動必修化の理由

1) 各校独自に行われている外国語活動のバラツキを是正するため。

全国の小学校の9割以上が主に「総合的な学習の時間」を使って外国語活動を行っているが、成果がある一方、内容や頻度にバラツキが生じていた。今回の必修化には、最低基準を設けるという意味がある。

2) 子どもの興味・関心・適応力が高い段階から外国語活動を導入し、より高い効果を上げる。

3) グローバル化への対応。

諸外国では、初等教育から英語教育が行われている。例えば、中国では2005年から小学校3年以上で、韓国では1997年から小学校3年以上で英語教育が始まっている。母国語にこだわるフランスでも、2007年より外国語1か国語が必修化され、そのうち9割が英語を選択している。日本だけがこの流れから外れるわけにはいかない。

4) 小学校での英語学習経験者は良い内発的動機づけを受けている。

現在の中学生は全教科の中で特に英語嫌いが多いが、早くから英語に親しませることによって、英語嫌いを減らせる。

## II. 小学校英語の基礎

### 1. 小学校英語活動の基本的考え方

1) 英語が必修化になるが教科ではない。従って、数値的評価は必要ないと言える。

さらに教員の問題がある。ベネッセの基本調査では小学校教員の60%が英語が好きであるが、指導については80%が自信がないと答えている。

2) 目的は、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、英語の音声や基本的

な表現に慣れ親しみ、言語や文化に対する理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする「態度を育成」し、中・高等学校においてコミュニケーション能力を育成するための「素地」をつくることである。中学校入学以前に英語を習った場合、高校生以上になっても、英語が好きで外国人と積極的にコミュニケーションをしたいという肯定的な動機づけを受けているとの研究結果が内藤（2005）を始め多く報告されている。

3) 5・6年生において、週1単位時間（年35単位時間）英語を行うことになる。

4) 教育体制は、担任教師とALTや英語が堪能な地域人材とのTTが基本である。

### 2. 校内体制

1) 学校教育目標と新指導要領の「外国語活動」の教育目標との関係を整理することが必要である。なぜなら、保護者の70%以上が小学校英語必修化に賛成だが、期待しない保護者が70%いるという調査結果もあるからである。

2) すべての教科の教育活動において「コミュニケーション能力の育成」をどのように図るのかという方針を確定する。そうすれば、5・6年において週1単位時間英語活動が必修化になったから行うという場当たりの対応ではなく、校内体制づくりができる。

### 3. 学校運営上の問題

1) 外国語活動に十分対応できる教員とできない教員がいる。従って、「決まったことだから仕方がない」というのは問題が生じる。できない教員を助ける学校運営が必要である。

2) 英語が得意な教員が、英語活動の責任者になるという従来の考え方が、失敗になる場合がある。小学校教員は英語が指導できることが教員の条件となっていないため、英語が得意な、または英語の教員免許を持っている教員が責任者になることが多いと考えられる。しかし、負担がすべて一人にかかったり、その教員が転勤してしまうと、担当者不在となり、大きな問題となる。全教員の協力体制が

必要である。

- 3) 地域人材の活用も大切である。新指導要領「第4章 外国語活動 第3 指導計画の作成と内容の取扱い 1 指導計画の作成にあたっては、次の事項に配慮するものとする」として「(5) 指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師または外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施にあたっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること」としている。内容は、無償ボランティア、有償ボランティア、臨時採用、非常勤などがある。ただし、無償は長続きしないとの報告結果がある。

#### 4. 保護者への説明

- 1) 後ろ向きの姿勢はよくない。しかし、過度な期待を持たせないようにする。保護者の70%以上は小学校英語活動（教育）を要望しているのであるから、自校の英語教育の進め方について積極的に説明をする。
- 2) 保護者に小学校英語の趣旨を説明しておく。「小学校での英語活動は単語を覚えたり、構文を理解したりすることが目的のではなく、英語でコミュニケーションする楽しさを実感することが目的で、コミュニケーション活動はコミュニケーションをしていること自体に意味がある」ということをしっかりと説明する。

#### 5. 「総合的な学習の時間」との関連

- 1) 平成23年から施行される新指導要領で「総合的な学習の時間」が1時間削減される。この削減と5・6年での外国語活動の1時間新設により、外国語に1時間取られたと感じる教育関係者が出てくる。
- 2) 「総合的な学習の時間」の指導目標を実現する形で「国際理解教育の一環としての英語活動」を行うことが必要である。

#### 6. 道徳教育と同じように他教科と協力して行う

- 1) 体育、家庭、算数、社会、理科などの他教科と英語活動を一緒に行うことも可能である。

#### 7. 学級担任主導のメリット

- 1) 子どもが安心して活動できる。
- 2) 子どもの興味・関心を把握できる。
- 3) 担任の指導力、創意工夫を活用できる。日直・クラス委員（長）への指示。英語で健康チェック。英語標識、アルファベット、絵や写真を貼るなどをして英語環境を作る。
- 4) 異文化、異言語への取り組みの見本（自分の殻を破るなど）を見せることができる。新しい自分を発見させる。日本語であまり話さなかった子どもが、英語では話すことも確認されている。

#### 8. 学級担任のすべきこと

- 1) 活動プランを事前に見て、イメージを持つ。年間指導計画を作成しておく。講師を迎えるとパターンが変わることがあるが、できれば一定の活動パターンがやりやすく負担軽減になる。
- 2) その日の授業に必要な語彙、表現などを事前に練習しておく。
- 3) TTでは学級担任がT1である。外部講師にすべてを任せないで、自信がない場合には司会役をする。
- 4) 終わった活動の記録を残す。また、他教師と情報交換をする。

#### 9. ALTの役割について理解する

- 1) 子ども達の「通じる」という喜びを与えてくれる人。
- 2) 異文化、異言語をもたらしてくれる人。
- 3) 英語の発音の見本を示し、活動の中で英語を矯正してくれる人。

#### 10. 活動の内容一高学年

- 1) 音声重視の活動。4技能を行うなら、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの順がよい。低、中学年から英語活動を行うなら、

高学年で読み、書きを導入するのはよいが、高学年から始めるのであれば、音声言語を最優先にすべきである。CDやDVDなどを多く使うのがよい。

- 2) Show and Tell, Skit, Speech などを取り入れるのもよい。そして、発表を聞くだけでなく interaction を取り入れるとよい。

## 11. 低・中学年生

- 1) 英語活動の時間を確保する。
- 2) 国際的なマナーを確立する。すなわち、大きな声で、目線を合わせ、ジェスチャーを用い、自分から積極的に行動し、発言させる。
- 3) 低学年は音声記憶を生かすのがよい。9歳の壁の前の時期である。
- 4) 中学年は恐れを知らず、積極的に話す。人生で最も元気な時期。体力的にも元気で、発想が豊かで、言葉の量が多く、何でも覚えまくり、自分の人生の輪の大きさをこの時期に決めるともいわれる。高学年生が理性が発達して考えてしまう場合とは異なるようである。

3年ではコミュニケーションのためのルールを守り、4年では応用ができるようになる。この時期、通じる力・生きる力を高めるとよい。

## 12. 校内研修を行う

- 1) 1年に3回、3年間は継続する。まずは全体会を行う。それから、学年、グループ毎。
- 2) 1学期に1回は集まって活動計画を確認する。孤立する教員がでないように気をつける。
- 3) ゲームはやってみる。歌は歌ってみる。実践が一番であろう。
- 4) 授業は順番に見せ合う。英語が得意で上手な教員が最初に行くとよくない。かえって、他の教員が引けてしまうことがある。
- 5) 教員同士でclassroom Englishの練習をするとよい。例えば、Hello, everybody! Let's start today's English activity. Are you ready? ... OK. Let's begin! など。

## 13. 他教科との連携について考える

- 1) 高学年では他教科の内容を取り入れること

で知的刺激を与える。簡単な歌やゲームばかりでは、高学年生の学習意欲を削ぐことにもなりかねない。

- 2) 他教科の内容といっても、基本はあくまでもコミュニケーション活動。イメージ教育における算数、理科などは異なる。既習（復習）事項や当該学年よりも下の学年の学習内容がよい。
- 3) コミュニケーション活動を通じた総合的な学力をつける。

## 14. 「英語ノート」の役割

- 1) 「英語ノート」の内容は、基本的に学習指導要領にあげられている小学校外国語活動を具現化したものである。従って、指導に慣れていない教員には非常に有効である。

- 2) 「英語ノート」は教科書ではないので、指導資料の年間指導計画の順に行う必要はない。また、全てしなければならないというわけではない。さらに、次のような使い方も考えられる。「英語ノート2」Lesson 9の職業を扱う課で「将来の夢を紹介しよう」(Let's Listen)で次のスピーチがある。“Hello, my name is Mathew. I'm from Canada. I want to be a soccer player. I want to play soccer in the World Cup.”これを単にそのまま聞かせてもよいが、次のように担当者が言葉を挟んでいくと communicative になり、言葉でのやりとりの楽しさを学ばせることにもなる。

教師：Hello, my name is Naito Toru.

CD：Hello, my name is Mathew.

教師：Mathew, where are you from?

CD：I'm from Canada.

教師：Oh, it's a nice country. ... Well, what do you want to be?

CD：I want to be a soccer player.

教師：Oh, a soccer player. That's nice. Why?

CD：I want to play soccer in the World Cup.

教師：It's a good dream. Thank you.

### 15. 「英語ノート」以外の教材も用意しておく よ

- 1) 「英語ノート」を教科書と同じように考えて全て終えようと考えないことである。また、終わってしまっていて、あとどうすればよいか分からない場合に別の教材を用意しておく  
とよい。
- 2) 絵本や紙芝居も有効である。読み聞かせることは、TVなどと異なり一方通行でなく、コミュニケーションが成立する。例えば、A: “Is it interesting?” B: “Yes!” A: “How do you feel about it?” B: “Happy.” など
- 3) 担任が一人で行う場合には、教室英語が役立つ。従って、表現リストを作っておくとよい。よく使う表現として、Stand up. Sit down. Make a circle. Make pairs. Come up here. Write on the blackboard. Ask your friends. What's this? How do you say...? How many? How much? Be quiet, please. Say it aloud. Speak clearly. How do you feel today? など。

### 16. 評価

- 1) 評価の機能：動機づけ機能＝学習意欲の向上、良い点や進歩の状況の評価。診断機能＝予診機能（レディネス等）・観察機能（授業中の観察）・総括機能（学習効果）
- 2) 評価の観点：子どもの積極性、減点評価ではなく加点点評価（出来たことに＋点）、個人間評価（比較）ではなく個人内評価（成長・伸び）
- 3) 評価方法：行動観察、発表観察、自己評価、相互評価など
- 4) 評価のサイクル：Plan→Do→Check→Action

## Ⅲ. 学習指導要領「外国語活動」解説

### 1. 第1 目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基

本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

中学校では英語を知識として教えるが、小学校ではそうしてはならない。例えば、What's this? の場合 What / is / this ? 疑問文、というような分析的・文法的な提示はしない。まして、主語・動詞などのような文法用語は絶対に用いない。How are you? Come here. Will you tell me why? なども実際に使うことにより体験的に学ばせる。そして、コミュニケーションの重要性を知るようにさせることである。

小学校から英語を学習していた生徒は、中学校より始めた生徒よりも、英語に対してより高い動機づけを持っていて、英語により肯定的な態度を示していることが私の研究も含めて多く報告されている。さらに、2006年のベネッセの高校生対象の調査から、中学時代に英語が嫌いになった高校生でも、小学校時代に英語が好きだった生徒は、再び高校生になって英語が好きになることがあるが、中学校から英語を始め、そのまま嫌いになった生徒で高校生になって英語が好きになることは皆無に近いとのデータがある。

小学校での英語教育は、中・高等学校でのコミュニケーション能力を育成するための「素地」を作ることである。そして、小学校では英語を体系的に分析的に教えないことであるが、絵カードと一緒に文字を見せてもよい。特に、高学年では音声言語に文字の補助があると理解促進に役立つという研究結果が数多くある。

### 2. 第2 内容 1 (1) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。

Communicationには verbal communication と non-verbal communication がある。That's nice. と言っても、顔の表情や態度でかなり意味が変わる。また、gesture も役割は大きい。英米特有の gesture についても学ぶ必要がある。英語の活動では、身振り手振りで多少大げさに行うのがよい。例えば、Stand up. Sit down. Make a circle. Be quiet. など...。また、English Room を作るのも効果がある。室内には国旗、写真、世界地図、英単語と絵などを貼っておき雰囲気づく

りをするのもよい。英語の歌も効果的である。

### 3. 第2 内容 1 (2) 積極的に外国語を聞いた り、話したりすること。

慣用表現として英語を習得していく。第2言語としての英語習得（ESL）者は、右脳を主に使う。How much? One ticket to Fukui. Thank you. など、慣用表現として覚えていく。

第2言語習得論における motivation の研究において、人が積極的に言語を学ぼうとする要因に、1) 言語は人を動かす（Stand up. と言うと立つ）、2) 新しい知識を得る、3) 冒険をする（不安はあるが知らない人と話してみる）、4) 刺激を求める、がある。このように、分析的な学習からは motivation は生まれにくい。従って、実践的に英語を使う環境を作ることが大切である。なお、高学年生になると、知的好奇心を刺激するような内容を取り入れるとよい。例えば、"Which is bigger, Japan or China?" など。

### 4. 第2 内容 1 (3) 言語を用いてコミュニ ケーションを図ることの大切さを知ること。

研究者の中には全コミュニケーション活動の2/3以上は non-verbal communication であると言う人がいる。同国人だと、そう言えるだろう。一人暮らしの大学生が休日でない日に、丸1日何も話さないで生活できたと言う。

しかし、問題解決など、やはり話さないと普通に生きてはいけない。子どもは、小学校時代に英語を学ぶことにより、以後の英語学習に高い motivation を示す。人はお互いに理解し合うためにコミュニケーションが必要であることを、小さいときから学ばせるべきである。

### 5. 第2 内容 2 (1) 外国語の音声やリズムな どに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知 り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。

言語音、リズムを実感する。例えば、bowwow, cock-a-doodle-doo, oink-oink など。また、日本語は高低アクセント monotonous language、英語は強弱アクセント stress-timed language。日本人は農耕民族で静的なリズム、

英米人は牧畜民族で馬が駆ける強弱のリズムを得たと言われる。英語のリズムに慣れ、また表現豊かに話すことである。

次に、日・英の比較をする。

- 1) 構文：日-SOV、英-SVO
- 2) 論旨：日-理由+結論、英-結論+理由
- 3) 言葉の省略：日-大切な言葉でも省略（どうも。今日は。さようなら。主語を省略することが多い。）英-大切な言葉は言う（I will do that. He can't do it.）
- 4) 方角：日-東西南北、英-north, south, east and west
- 5) 数え方：日-指を折る、英-指を開く
- 6) お釣り：日-引き算、英-足し算
- 7) 言語の意味：日-謙遜（粗飯、愚息、つまらないものですが）、英-そのままの意味（I hope you will like it. I am proud of my son.）

日-明言を避ける（Yes, No. を明確に言わない。）、象徴性が高い、五七五の韻律、英-明言する（Yes, No. を明確に言う）、論理性がある、明確さ重視

### 6. 第2 内容 2 (2) 日本と外国との生活、習 慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方 や考え方があることに気付くこと。

- 1) 異文化理解。子ども達が世界には様々な民族、言語、考え方、表現法、生活様式があることを分かるようにする。そして、異なることに対して、優劣、善し悪しといった上下関係がないことも知る。
- 2) 比較文化。日本的な行事、習慣-花見、雛祭り（桃の節句）、子どもの日（端午の節句）、七五三など。ジェスチャー。文化の比較（風呂敷等...）

### 7. 第2 内容 2 (3) 異なる文化をもつ人々 との交流等を体験し、文化等に対する理解を深め ること。

- 1) ホームステイ。米国では家族の一員として扱われる。日本では、どちらかと言えば客扱い。Bathroom も日本では湯船に浸かり温

まり疲れをとる。米国ではシャワーで洗い流すのが主。

2) 英米では紹介は重要なこと。必ず名前を言う。This is my brother, Tom.

先生は Mr. (Ms.) Smith。Teacher Smith (or Smith Teacher) ではない。親しい間柄では必ず first name で呼び合う。話し相手の名前を頻繁に呼び合うので、必ず名前を覚える。Hi, Tom. など。話す相手の目を見る。日本では直視する方が良くないが、英米では相手を見ないと、不誠実と見られる。欧米では、自分の尊厳を守り、相手の人格を尊重する。

**8. 第3 1 (1)** 外国語活動においては、英語を取り扱うことを原則とすること。

文部科学省の小学校英語活動等実施状況調査(平成19年度)では、全国21,864校中21,220校が英語活動を実施している。すなわち、英語が約97.1%である。そして、現在「英語ノート」が作成され、英語を学ぶようになされている。しかし、第5学年の Lesson 1 で「世界のこんにちは」では世界のいろいろな挨拶が紹介され、Lesson 3 「数で遊ぼう」でもいろいろな国の言葉で数の言い方や数え方を扱っていてもいる。

**9. 第3 1 (2)** 各学校においては、児童や地域の実態に応じて、学年ごとの目標を適切に定め、2学年間を通して外国語活動の目標の実現を図るようにすること。

児童や地域の実態に即する英語活動とする。また、5・6年の2年間の英語活動と中学校の連携を考えていくべきである。

**10. 第3 1 (3)** 第2の内容のうち、主として言語や文化に関する2の内容の指導については、主としてコミュニケーションに関する1の内容との関連を図るようにすること。その際、言語や文化については体験的な理解を図ることとし、指導内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になつたりしないようにすること。

言語や文化についての体験的理解をする。例えば、オーストラリアのクリスマスの写真を見せる

と、Tシャツに半ズボンのサンタクロースがいる。どうしてか、を考えさせるのもよい。北半球と南半球の違いなども面白いと言えよう。

**11. 第3 1 (4)** 指導内容や活動については、児童の興味・関心にあつたものとし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること。

「英語ノート」に5年生では「時間割を作ろう」「ランチメニューを作ろう」がある。創意工夫をして行える。6年生では「自分の一日の紹介しよう」「自分の夢のスピーチ」などがあり、発展的活動として面白い。

「国語科」-「国語五(上) 銀河」(光村図書)に和語・漢語・外来語を扱った内容がある。英語の television がテレビとなった例がある。また、外来語の発音と実際の英語の発音の違いについても取り扱える。

「音楽科」-「小学生の音楽5」(音楽芸術社)にはアジアの音楽に親しもうという単元がある。また、「小学生の音楽6」(音楽芸術社)に Michael, row the boat ashore や Sing a Rainbow がある。

「図画工作科」-「図画工作5・6上 自信をもって」(日本文教出版)には「広がれアート!学校の案内板」という単元がある。ここでは、案内板に英語名を入れることができる。また、「北風と太陽」の物語をペイントソフトで描く活動を利用して、英語紙芝居を作り発表することもできる。

低学年用の易しい内容でも、英語で低学年に読み聞かせるという意味で作品を作らせると、6年生も張り切ってやってくれるであろう。

**12. 第3 1 (5)** 指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師または外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施に当たっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること。

外国語の授業には、学級担任(HRT=Home



Room Teacher)、日本人英語教師(JTE=Japanese Teacher of English)、ALT (Assistant Language Teacher) の3人が考えられる。HRTが学校のコミュニティを、JTEが地元・国を、ALTがグローバルなコミュニティを代表しているといえる。

**13. 第3 1 (6)** 音声を取り扱う場合には、CD、DVDなどの視聴覚教材を積極的に活用する。その際、使用する視聴覚教材は、児童、学校及び地域の実態を考慮して適切なものとする。

マルチメディアは必要不可欠なものとなってきている。教員も使い方に習熟しなければならない。パソコンも同様である。聴覚に視覚を加えると、理解にかなりの効果があることが報告されている。例えば A green frog jumped into the pond with a big splash. この文が分かりにくくても、視覚での映像があれば、かなり英語理解の助けになるであろう。

**14. 第3 1 (7)** 第1章総則の第1の2及び第3章道徳の第1に示す道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、外国語活動の特質に応じて適切な指導をすること。

- (1) 基本的な道徳は、世界中の人々と共有されている。伝統的な物語（童話や絵本）を読んだり視聴したりすることによって、子ども達は類似点を認識する。
- (2) 世界各地の道徳観の相違点は、問題解決能力に大きな影響を与える。
- (3) 童話や物語は、子ども達に異なる文化などについて学ぶのに貴重なものとなる。イソップ物語は、道徳的なメッセージを沢山含んでいると言える。-「蟻とキリギリス」「狼少年」「裸の王様」「The Empty Pot」なども面白い。

**15. 第3 2 (1) ア** 外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、児童の発達の段階を考慮した表現を用い、児童にとって身近なコミュニケーションの場面を設定すること。

5年と6年は1年の違いであるが、精神的にも

肉体的にも違いは大きい。しかも、日本語年齢と外国語年齢に大きな差がある。従って、高学年生は簡単な表現を繰り返しているだけでは飽きてしまう。発達段階に応じた英語教育が必要となる。「こんにちは」でも世界各国の挨拶を学ばせる。また、How are you? に対していつもI'm fine, thank you. And you? では問題がある。その時の身体の状態は違うし、人によっても異なる。I'm fine. 以外にも I'm sleepy. I feel bad today. I'm very hungry now. などあってしかるべきである。数も1から20までを扱う場合、ゲームを用いたり、必然的に出てくる数を数えたりするとよい。自己紹介も、Hello. My name is Toru. Nice to meet you. だけでなく、I like cats. I have a nice cat. Her name is Lucky. など加えて拡張していくとよい。買い物ゲームも面白い。外来語を取り入れるのも比較ができてよい。You like テレビ? Yes, I like watching television. など。曜日などは歌で覚えるとよい。6年になると、例えば月の練習をするのに、誕生日も加えるとよい。When is your birthday? It's January 11th. など。できることを紹介し拡張練習をする。Can you play the piano? Yes, I do. How about you? Well, I can't play the piano, but I can play the guitar. など。道案内も面白い。Where is the post office? - Go straight. Turn left. この時、いろいろな建物についても学べる。hospital, bank, city hall, flower shop, etc. 行きたい国についても会話が弾む。Which country do you want to go to? - I want to go to England, because it's a beautiful country. また、日常のことも身近でよい。What time do you get up? - Well, I get up at 7. ... Then I go to school at 7:40. など。

**16. 第3 2 (1) イ** 外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること。

言語習得は、意味（見る、聞く、考える、理

解) → 音声 (声に出す) → 文字 (読み、書き) の順序となる。小学校外国語活動では音声言語がまず第一である。それもlistening からspeakingへ、である。文字指導は慎重にしなければならぬ。基本的に小学校では文字指導はしなくてもよい。しかし、「英語ノート」では6年でアルファベットの文字が認識できるように単元が組まれている。文字は教えるのではなく、音声の補助的手段として用いるとよい。文字は、児童の知的欲求に合うだけでなく、音声に文字の視覚情報が加わることによって、内容理解が進み、記憶に結びつき、外国語に対する興味・関心を促進することができる。アルファベットの大文字、小文字の認識は、アルファベット・カルタや歌、アルファベット迷路、キーボード入力などが面白い。「英語ノート」では、アルファベット・パズルなどのアルファベットのゲームがある。

17. 第3 2 (1) ウ 言葉によらないコミュニケーションの手段もコミュニケーションをさせるものであることを踏まえ、ジェスチャーなどを取り上げ、その役割を理解させるようにすること。

前述のように、コミュニケーションにはverbal communicationとnon-verbal communicationがある。バードホイステルのKinesics and Contextによるとverbalが35%、non-verbalが65%であるという。また、メーレイビアンとのCommunication without Wordsでは7%が言語、38%が音声の特徴、55%が顔の表情。すなわち、93%がnon-verbalであるという。「英語ノート」では5年の「ジェスチャーをしよう」で取り上げている。

18. 第3 2 (1) エ 外国語を通して、外国語や外国の文化のみならず、国語や我が国の文化についても併せて理解を深めることができるようにすること。

世界のさまざまな言語や文化を知ること。「英語ノート」の「いろいろな国の食事のしかた」「カレンダーをつくらう」など。日本の伝統文化を知ること。Let's enjoy 世界遺産。- 日本: 清水寺、

中国: 万里の長城、エジプト: スフィンクスとピラミッド、インド: タージマハル、豪州: エアーズロック、アメリカ: 自由の女神 など。

19. 第3 2 (1) オ 外国語でのコミュニケーションを体験させるに当たり、主として次に示すようなコミュニケーションの場面やコミュニケーションの働きを取り上げるようにすること。

[コミュニケーションの場面の例] ア 特有の表現がよく使われる場面 ○あいさつ ○自己紹介 ○買い物 ○食事 ○道案内など イ 児童の身近な暮らしにかかわる場面 ○家庭での生活 ○学校での学習や活動 ○地域の行事 ○子どもの遊び など

イの例: What time do you get up? - I get up at 7.

波線部を have dinner, go to school, watch TV, start to study など入れ替えて練習もできる。

[コミュニケーションの働きの例] ア 相手との関係を円滑にする イ 気持ちを伝える ウ 事実を伝える エ 考えや意図を伝える オ 相手の行動を促す

20. 第3 2 (2) ア 第5学年における活動

外国語を始めて学習することに配慮し、児童に身近で基本的な表現を使いながら、外国語に慣れ親しむ活動や児童の日常生活や学校生活にかかわる活動を中心に、友達とのかかわりを大切にしたい体験的なコミュニケーション活動を行うようにすること。

「数で遊ぼう」。基本表現は How many? で、まず one から ten まで、次に eleven から twenty となる。

「いろいろな国の衣装を知ろう」Do you have brown shirt? - Yes, we do. Here you are. - Thank you. など。

「外来語を知ろう」What do you want? - Tomato, please. 波線をlemon, melon, cherry, donut, pudding, cake などに替えて言うことができる。

「自己紹介」Hi. My name is Harumi. Nice to

meet you. I like tennis. How about you?

「時間割をつくろう」

「クイズ大会をしよう！」－ブラックボックス・クイズ、ピクチャー・クイズ、シルエット・クイズ などが考えられる。What's this? が質問で、答えは単語だけでなく、文で答えるようにさせるとよい。－ It's a watch. など。

## 21. 第3 2 (2) イ 第6学年における活動

第5学年の学習を基礎として、友達とのかわりを大切にしながら、児童の日常生活や学校生活に加え、国際理解にかかわる交流等を含んだ体験的なコミュニケーション活動を行うようにすること。

Show and Tell

「カレンダーをつくる」 誕生日を質問し記入する。例えば、When is your birthday? – It's January 11th.

「できることを紹介する」 Hello. My name is Yuka. I can play tennis. I also can play the piano. But I can't ride a unicycle.

「行ってみたい国を紹介する」 Hello. I want to go to England. It's a very beautiful country. I like it very much.

自分たちのオリジナルな劇をつくってみるのも面白いであろう。

## IV. 留意すべき点

### 1. 校内体制

- 1) 外国語の指導に自信がない教員が5・6年生の担任として中心になり、指導に自信がある教員がサポートするのが一番良い。その理由は、自信のない教員の視点から検討がなされ、その要望を基に始められるからである。
- 2) 「ALTに任せるから問題ない」は大きな問題を抱える。あくまでもT1は担任である。そして、外部人材を活用するのは良いことである。

### 2. 校内研修を行う

- 1) 外国語活動の教育目標の理解とカリキュラ

ム全体の把握

- 2) 使用教材の理解 「英語ノート」など
- 3) 指導方法の実践研究

## 3. 保護者への説明資料を作成する

- 1) マニフェストの中の外国語活動の位置づけを考える。
- 2) 保護者が考える英語活動指導者（文科省H.16）を参考にする。  
小・教員とALT 89.5%、小・教員と地域人材17.1%、小・教員と中・高英語教員11.1%、小・教員のみ10.2%、中・高英語教員5.5%

## 4. 日本人指導者の募集に関して

地域人材の募集は8:30～17:30の常勤的講師と8:30～12:00の非常勤的講師が考えられる前者は比較的年齢層が低く、後者は比較的年齢層が高い。

## 5. 校内研修のための資料作成

「英語ノート」は「英語ノート指導資料」「小学校外国語活動研修ガイドブック」「小学校外国語活動DVD “You can do it.”」も配布されている。指導資料には年間35回分の詳しい授業計画が載っている。かなり綿密に練られた便利な教材と言える。

教師の英語力向上のためにclassroom Englishを少しずつ覚えていくとよい。Hello, class (everybody). Now let's begin. Let's sing. Let's listen (to the CD). You did a good job. Very nice!

## 6. ALTの選任

ALTとは連絡を密にし、授業で何をどのようにして欲しいのかをはっきり伝えておく必要がある。ALTも個人差がある。一般的にはビジネスライクといえよう。勤務時間もサービスで遅くまでとは考えない。彼らは、契約時間内は一生懸命やるが、私的時間は大切に使うと考えるのがよい。

## 7. 日本人指導者との関係

学校側としては、簡単な委嘱状を用意し、1年ごとに更新していくとよい。ずるずると継続する

と後に問題を残すことにもなりかねない。

外部講師は素晴らしい人が多い。また、信頼関係があれば打ち合わせが充分でなくても活動がうまくいく場合が多い。

## 8. ALTとの打ち合わせ

中学校（や高等学校）での英語教育とは異なること、活動中心で活動を楽しむこと、T1は担任であること、文法や訳を求めないこと、などを確認しておく。ALTの不満は、自分を活用してくれない、あまりすることがない、CD代わりに使われた、などがあることを念頭におくべきである。本物のコミュニケーションは、何にもまして素晴らしいことである。

## 9. 指導計画の作成

完全実施に向けて、平成21年から無理をせずに、段階的に指導案作成に取り組む。総合的な学習の時間で行われた英語学習の成果も生かす。学校全体の指導計画の中で作る。担任同士の情報交換も有意義である。大胆に取り組み、繊細に修正を加える。蓄積は宝である。

## 10. 研修を受ける

英語力を身につける。NHKでは基礎英語講座でも充分。小学校英語活動の指導者であるので、音声中心の訓練をする。

校内での研修－教材研究。指導計画の再検討。長期休業中の教材開発・作成。教委主催の研修会。学会＝日本児童英語教育学会（JASTEC）、小学校英語教育学会（JES）、英語授業研究学会。その他、中部地区英語教育学会、全国英語教育学会、外国語教育メディア学会、大学英語教育学会 などがある。

## 11. 保護者への説明（学校通信などを利用して）

- 1) 新学習指導要領と外国語活動の目標を保護者にも説明する。
- 2) 英語活動導入は、適応力・グローバル対応・教育の機会均等であることを知らせる。（全国97%以上の小学校が、主に総合的な学習の時間を利用して英語活動をしてきたが、学校

でかなりのバラツキがある。）

- 3) 英語活動は、教科ではなく必修化である。従って、道徳と同様点数評価は行わないことを知らせる。
- 4) 担当者と年間指導計画を知らせる。
- 5) ALTがいる場合、紹介する。写真入りで経歴なども加えるとよい。
- 6) 外国語活動年間指導計画（5年、6年）も知らせるとよい。

## 12. 保護者への説明会

- 1) 学級通信よりも具体的な内容を説明。
- 2) 保護者が受けてきた英語教育とは異なる活動であることを理解してもらうために、目的を説明する。
- 3) 模擬授業を体験してもらえるとよい。

ベネッセが行った小学校英語に関する保護者調査（2007）を見ると、50%以上の保護者が英語が好きではない、90%以上が英語を使うことに自信がない、約80%が今までの英語教育は役に立たなかった、50%以上が英語で苦勞をした、と回答している。従って、かなりの保護者は今までの英語教育は何らかの問題があると感じている。

- 4) 今回の小学校英語の目的をはっきり説明し、「英語ノート」の活動例などでも説明をする。音声面を重視した活動であることを説明し、小学校で英語教育を受けた子ども達が高・高等学校へ行って、本格的に英語を学ぶとき、高いmotivationを示すことを説明する。小・英の内容は英語自体というよりも、国際理解につながるテーマが多いことも付け加えておく。

## 13. 保護者の授業参観を行う

ベネッセの調査（2007）によると、ほとんどの小学校で英語活動が行われているのに、保護者の60%程度しか認識していなかったという不思議な結果が出た。また、保護者と教員の重要だと考えることの間に差異がある。ベネッセ（2008）によると、重要なことは「英語を聞いたり話したりすること」は90%前後で同じだが、「英語の文字や

文章を読むこと・書くこと」は保護者がそれぞれ 67.5%, 61.3%であるのに、教員は32.7%, 17.5%と大きな差がある。

従って、保護者に説明をしたり英語授業を公開して理解を得る必要があろう。

## 14. PDCAを行う

PDCAはDr. Edwards Deming (1950) が企業における一つのマネジメントの方法として提唱したものである。Plan→ Do→ Check→ Act (ion) であるが、教育活動では評価からスタートするとされる。また、当初は課題も多く試行錯誤となるので、まずは短期のサイクルで、それから学期単位のサイクルでというのがよいと言える。

## V. 先進校に学ぶ

### 1. 指導要領・第4章 2 1 (2) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。

「楽しさ」を体験させるには次の4つが上げられる。

- 1) 安心して臨める場所にする 2) 実際に体験する 3) 体験を楽しむ 4) 役割を果たす。
  - 1) 大きな声が出せる、自由に動き回れる、間違ってもいい など。
  - 2) ALTと実際に握手をする、話す、挨拶をする、通じる、クリスマスカードをつくる など。
  - 3) 大きな声で歌う、ゲーム (Bingoなど) 感覚で学ぶ、チャンツ (音に合わせて発生する練習) を入れる など。
  - 4) 役割を与えられると参加しやすくなる。全員が役割を果たす。

楽しい時間を持つために ①喜んで参加する ②遊びながら繰り返す ③挑戦する ④少し分かる ⑤前より分かる ⑥次が楽しい を実現する。

コミュニケーション活動の実際

- (1) ピクチャーカード (2) CD・DVD (3) 絵本 (4) ビンゴ (5) インタビュー・シート

### 2. 第4章 2 1 (2) 積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。

1) Pattern practice で基本のフレーズを学んでから実践する。

①単語の練習 ②単語を含む文の練習 ③質問文の練習 ④Q&Aの練習

例：①pen, eraser, pencil, ruler, scissors, glue, etc. (文房具の買い物の場合) ②I want these scissors. ③What do you want? ④Q: What do you want? A: I want these scissors.

2) 楽しむ、聞く、話すという環境作りをする

3) 身近な話題を取り上げる

4) 質問に工夫をし積極的にさせる 「どうして?」「なぜ?」...

間違いを恐れさせないこと。

5) 日本語では話せない内容でも英語では話せることがある。また、Yes No をはっきり言うことも学ばせる。

英語の時間はclassroom English を使い gesture を多く用いて行う。日本語での説明を長たらしくするのはよくない。

### 3. 第4章 2 2 (1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。

1) 従来の英語教育にとらわれない

2) 無理に発話させようとしない

3) 子どもの反応に耳を傾けよう

例：月の発音練習時に…September, October, November, December と言っていくと -ber が音の響きとして面白いと言い出した。それから興味を示して、教員が難しいと思える January, February なども覚えてしまったということがある。また、2ヶ月づつの方が覚えやすいとも言える。January - February, March-April, May - June, July - August, September - October, November - December

4) 教科・領域との関連を重視する

## VI. 第二言語習得論 (Second Language Acquisition : SLA) からの示唆

### 1. UG (Universal Grammar) 理論

Noam Chomskyの理論で、「子どもの文法獲得能力は、生得的なlanguage faculty (言語機能) であるLanguage Acquisition Device : LAD (言語獲得装置) によって可能となる。

L1 インプット → UG (LAD) → I 言語 (個別言語) I=internal

LADはまだ明らかにされていないので、時々black boxとも呼ばれる。

一方、実際の言語運用はE言語と呼ばれ、I言語が適用された具体的な文の集合という意味で外延的 (extensional) である。E言語はI言語に基づく文法性だけでなく、文脈や状況、社会的習慣など、外在化された (externalized) 要因が関与する。

### 2. Critical Period Hypothesis : CPH (臨界期仮説)

Lenneberg (1967) はChomskyと同様、言語機能の生得性を主張しており、その機能が発揮される臨界期を2歳から思春期の始まる12歳頃までとした。I言語は5・6歳で安定状態となるが、2歳頃から驚異的なペースで語彙、文が増えると言われる。1日最高9語、1時間に1語とも報告されている。

### 3. Lateralization (一側化 : 側性化)

脳が右半球と左半球に分かれ、各々の機能がある。その脳機能において、人間の認知的・身体的発達に伴って分化することを一側化という。言語と左半球の結びつきなどもそうである。

### 4. 9-year

言語習得における9歳の壁と言われるものである。9歳以前は言語を丸呑みにし、9歳以降はやや分析的に言語を捉えると言われる。2-6-9-12歳が言語習得のmagic yearと言えるのであろうか。12歳以降は分析的学習が得意になると言われる。

## 5. Three types of language acquisition

First Language Acquisition 第1言語習得  
Second Language Acquisition 第2言語習得 (第2言語としての英語習得はESL [English as a Second Language] と呼ばれる。)

Foreign Language Acquisition 外国語習得 (外国語としての英語習得はEFL [English as a Foreign Language] と呼ばれる。)

\* 人がその生まれた土地や環境の中で成長していくうちに習得する言語を第1言語と言い、それに次いで必要のために習得する別の言語を第2言語と言う。従って、外国語 (foreign language) とは区別して考える。ちなみに、日本における英語の習得はEFLである。EFLは英語に触れる時間や学習時間が遙かに少ないので、ESLの学習方法とは異なる。

## 6. Controlled processing & automatic processing

Controlled processing (統制的処理) は十分に学ばれていない項目を処理する場合に典型的に表れる。Automatic processing (自動的処理) は十分に学ばれて長期記憶の中に貯蔵されている項目に直接アクセスできる場合である。

## 7. Communication strategy

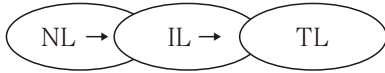
- 1) avoidance (回避) : 難しそうなことを避ける。
- 2) paraphrase (言い換え) : 近い言葉で代用する。遠回しに言う。  
Ex. veterinarian → animal doctor :  
balloon → air ball など
- 3) conscious transfer (意識的転移) : 母語の単語を発話の中に挿入する。
- 4) appeal for assistance (援助訴え) : 対話者に援助を訴えること。
- 5) mime (身振り表現) : ジェスチャーなど非言語的 (non-verbal) な手段に訴えること。

## 8. Interlanguage : IL

中間言語 : native language (NL:母国語) と

target language (TL:目標言語) の中間に位置する学習者言語のこと。

L. Selinker (1972) が考えた言葉。これは、NLともTLとも異なった特性を持ち、それには系統性が見られると言われる。図示すれば次のようになりNL/TLの言語ルールでは説明がつかない。



## 9. Sentence pattern

第1文型(SV) → 第2文型(SVC) → 第3文型(SVO) → 第4文型(SVOO)までは順調に習得されるが、第5文型(SVOC)になると習得が困難になると言われる。

## 10. Acquisition Order

習得順序のこと。そしてand, but, if, whenなどの接続詞は習得上それほど困難はないが、関係詞構文は困難である。仮定法も同じである。

<u>習得がはやいもの</u>	<u>遅いもの</u>
発音が明瞭なもの	発音が不明瞭なもの
the	a
不規則動詞	規則動詞
頻度が高い形態素や単語	頻度が低い形態素や単語
have to	must
具体的なもの	抽象的なもの
<u>in the box</u>	<u>in ten days</u>
(後者が時間で抽象性が高くなる)	
近い (here)	遠い (there)

\* (形態素 = morpheme : 言語において意味を持つ最小単位。例 : pencils は pencil と s の 2 つの形態素を持つ 1 word.)

小学校で学ぶ英語は具体的な語が多く、扱う文構造も簡単なものが多いので習得の速度は一般的に速い。

## 11. Immersion program

学校教育のすべて、もしくは一部分で、母語ではない言語を教授言語にすることによって、その

第2言語を習得させ、かつモノリンガルと同様の教科内容も教えようとする教育。

Hamers & Blanc (2000) によれば、主にフランス語のimmersion教育では 1) 長期的に見れば母国語に遅れはない、2) 第2言語の能力は伝統的な外国語としてのフランス語教育をうけた子どもよりもはるかに高い学力が身につく。種類はEarly Total Immersion, Partial Immersion, Late Total Immersionがある。Partialは約半分を母語、あと半分を第2言語で教える。研究の結果3つに有意差はなかったが、partialがやや劣ると言われる。

## 12. Project型

プロジェクト (project) は「計画 (する)」の意味である。英語教育では「ある課題を設定し、それを遂行し、アウトプットする」ということである。英語を「教える」のではなく、「プロジェクトの中で英語を使わせる」ということ。つまり、お互いの持ち味を生かしながら価値ある共同作業を行う、ということである。プロジェクト課題にはいろいろなものが考えられる。次のような課題 [「絵本の翻訳」「子どもの遊び調査」「母親のイメージ調査」「先生の特徴調査」「朝日小学校の紹介」をしよう!] などがある。例えば、母親のイメージでは「温かい - 冷たい」「優しい - 厳しい」「忙しい - 暇な」などのような形容詞で比較する。また、父親との比較で、どのように違うかといった問い (research questions) も出てくるだろう。

## 参考文献および引用文献

- 大津由紀雄, 「母国語を基盤に据えた言語教育」『教職研修』(2009)
- 小池生夫, 『第二言語習得研究の現在』(2004)
- 佐貫晃弘, 「小学校英語活動スタート」『英語教育 4』April, Vol.58 No.1 (2009)
- 内藤 徹, "Effects of the short term overseas study on English - 3 weeks of study in Australia" 『中部地区英語教育学会紀要27』pp.293-298 (1997)
- 内藤 徹, 『新しい 英語教育ハンドブック』(1996)
- 内藤 徹, 「中学入学以前の英語学習に関するアンケートおよび効果の分析 - 高校生の場合」『中部地区英語教育学会紀要35』pp.47-52 (2005)

- 松川禮子,『小学校英語活動を創る』(2003)
- 文部科学省,『英語教員研修ガイドブック』(2003)
- 文部科学省,『Handbook for Team-teaching (Revised Edition)』(2002)
- 文部科学省,『小学校 英語活動実践の手引 (Practical Handbook for Elementary School English Activities)』(2001)
- 文部科学省,『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』(2008)
- 文部科学省,『平成19年度 小学校英語活動実施状況調査集計結果』(2008)
- 柳 善和,『小学校英語教育におけるインターネットを利用した、話す活動のカリキュラム開発研究』(2008)
- 吉田研作,『21年度から取り組む 小学校英語』(2008)
- 和田 稔,『小学校英語教育A to Z カリキュラム編成ガイド』(2000)